

はじめに

平成26年4月に潟環境研究所が発足し、新潟市の16の潟群について調査・研究を始めてから丸5年が経とうとしています。潟環境研究所の研究者による研究成果を、このような報告書として発刊するのも4冊目となりました。

平成29年度を振り返ると、湿地と共生する都市としての本市の未来について、東京大学、法政大学、早稲田大学の都市景観を専門とする学識経験者の協力を受けて調査・研究し、福島潟、鳥屋野潟、佐潟、かつてあった鎧潟について、現在の価値の把握を交え、2050年頃の越後平野における人と自然の将来像を構想し、それを「潟・こころの風景」と総括して、シンポジウムなどの場で発表しました。新潟市はまさに「ラムサール条約都市」と表現するにふさわしい都市であることを確信することができました。

また、平成30年度には、多くの市民や地形・生物多様性・植物・農業水利・土木・歴史・民俗などの専門家（客員・協力研究員など）とともに、それぞれの潟の歴史と現在の状況を踏まえ、分野横断的に調査・研究活動を進めてきた成果を、『みんなの潟学―越後平野における新たな地域学』（2018）として出版しました。

20世紀は、科学技術で自然を破壊して経済成長を遂げてきました。身近な自然の豊かさは感性で知ることができますが、地域全体の時空間の中で、その自然と人がどのようにかかわってきたのか、それは知性で鳥の目・虫の目になって把握するしかありません。自然に対する感性と知性があるのはじめて、地域の自然を護り、その豊かさが持続できると考えます。21世紀は、劣化した自然を回復させ、自然と共生する安定した社会とすることで、新たに生きる希望を作り出していく世紀にしたいと考えます。そのためには、自然に対する感性と知性がともに不可欠です。その知性を磨くうえで、潟環境研究所が著した『みんなの潟学』が必ず役に立つものと考えています。市立図書館などに配架しておりますので、ぜひ多くの皆様に読んでもらいたいと思います。

最後に、この場をお借りしてもう1つ報告があります。私はこの3月末をもって潟環境研究所の所長としての役目を終えることになりました。この5年間、新たな発見や出会いに楽しく仕事をさせていただき、感謝に堪えません。多くの皆様に御礼申し上げます。今後も行政と地域住民が連携し潟の魅力を磨き上げるとともに、「地域の宝」として将来に渡り保全されていくことを願っております。



新潟市潟環境研究所

所長 大熊 孝

平成31年3月